

人文会ニュース

1991.10

独創的人文書販売の構築

.....丸善広島本通店 **船木照道** 1

[人文書講座24]

人にはどれだけの知識が要るか

——哲学の存在理由..... **加藤尚武** 7

図書館で考える.....市川市立図書館 **小川俊彦** 22

ABAブックフェア見聞記

.....筑摩書房 **菊池明郎** 27

62

あの「戦争」は
いったい何だったのか？

**湾岸戦争は
起ころなかつた**

●Jポードリヤール

90年代最初の大イヴェント
の中に見えた、情報に支配
される現代世界の破滅的な
行く末とは？▼1200円

エイズ疑惑

「世紀の大発見」の内幕

クルードソン 国際的な論争再燃/
エイズ病原体の発見をめぐる大疑惑
を暴く迫真のドキュメント▶1900円

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1
☎03(3439)0128(営業) 表示価格は税込み

大月書店

子どもたちは
泣いたか ナチズムと医学

シュヴァルベルク著/石井正人訳 ナ
チス親衛隊医師の生体実験に使われた
子どもたちの運命を追う迫真のルポ。ア
ンネ・フランク賞受賞。 46判・2200円

人にとって
クルマとは何か

杉田聡著 自動車による交通事故が
激増し、環境破壊が進むなかで、はた
して人はこの鉄でできた悪魔をコント
ロールできるだろうか。46判・1400円

〒113 東京都文京区本郷2-11-9
☎03(3813)4651/FAX03(3813)4656

林見史・日野舜也・小田英郎 編
アフリカの21世紀(全3巻)

第一線研究者による分析と展望。
内容見本呈 2884~3399円 260~310

谷村晃・原田平作・神林恒道 責任編集
芸術学フォーラム

全8巻/内容見本呈 各ジャンルの
現状と総括。3000~4500円 310

J.クリステヴァ/棚沢・天野 編訳
女の時間

〈男〉が〈女〉のように生きる新
しい平等思想の開始。2575円 260

宮地佐一郎 編・解説
中岡慎太郎全集

〈中岡研究〉の集大成。幕末維新研
究の白眉。(全一卷) 22,660円 460

* 定価は税込/振替東京5-175253

東京文京 電話(03)
後楽2-23 勁草書房 3814-6861

御茶の水書房

今、日本と世界を考える
注目・話題の書

●なぜ原発を避よのか、その拡大戦略の本質を問う!!

**アメリカ原子力
産業の展開**

電力支配をめぐる百年抗争

R.ルドルフ・S.リドレー(著)「存真」樋口健一
蔵本喜久十・岩城淳子・梅本哲生・斎藤叫一訳
菊判・480頁・定価3914円

日本は四〇基もの新規建設、アメリカは「安全」と新
型原子炉の出現を予告する。電力産業百年に及ぶ抗
争を検証し、その本質を明示する。

〒113 東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684)0751

〔人文書販売ABC〕

独創的人文書販売の構築

丸善広島本通店 船木照道

このたび、人文会より「人文書販売ABC」というテーマで執筆してほしいという依頼を受けた。若輩者の私にとってこの由緒ある「人文会ニュース」に執筆するということは、とても荷が重く、丁寧に御辞退させていただこうと思ったが、いろいろと考えた末にこのような機会はそうあるものではないと思い直し、今まで自分が試行錯誤して行ってきたことの一つの区切りとして、また、新たなステップとしてこれを受けることにした。この業界に長年いらっしゃる方々にはこれから私が述

べることは、あたりまえの事すぎて、新鮮さなどないかもしれない。しかし、昔からこの業界は、「進歩が遅い」とか、「販売のノウハウが知りたい」などの多くの問題や課題がまだ山積されている状態である。例えば、販売のノウハウといったものが、内容や条件によってはすべての書店に適用できるといって一元的なものではないことから、ベテランの書店員でもすべての書店に適用できるノウハウを見つけ出すのは難しいことである。そこで今、望まれているのは、どの書店においても適用できる

人文書販売のノウハウである。ここで述べることは、あくまでも、ある一書店のケーススタディであり、すべての書店に適用できる販売のノウハウを述べることは不可能かもしれない。ただ、ある程度、人文書販売のための参考になり、また少しは新鮮さを感じてもらえればと思っている。

それでは人文書担当者としての今までの取り組みのねらいと結果を述べたいと思う。その前に「人文書」というものをここでは、大まかに哲学・思想・心理・宗教・歴史・社会・教育と分類して置きたい。

まず人文書の経験を述べると丸善に入社する前には、小型店（東京の駅ビル）で文庫・雑誌・コミックなどの書籍には接していたが人文書はなかった。入社してからは、数々の分野の書籍を浅く広く担当し、当然人文書も担当した。

しかし、ある時点までは特に人文書だけを中心に扱ってきたということはなく、その言葉を意識したこともなかった。「人文書」——この言葉を私が強く意識したのは広島へ転動になってからである。

丸善広島本通店は、広島を中心にあり、他の競合店

のひしめく、激戦の場所の一つである。そういった不利な立地条件に加えて和書の三層、つまり多層階というデメリットと人材の不足と教育の不徹底という問題のある最悪の状態の時に赴任した。

三層の分野構成は、一階に文庫・雑誌など、二階に人文書・ビジネス書など、そして三階には、理工学書を中心とした専門書である。坪数は二二〇坪（和書一二五坪）で総合的な書籍を扱う書店としては、中途半端な広さの店舗である。また、文具及び洋品といった異業種の商品と混然一体となっているため複雑を極めていた。

一階は日常の業務をきちんと遂行していけばこなせるもので、これといった専門的な知識もあまり必要ないと思う。三階の専門書は昔ながらの固定客が付いているため、その客を大切にし、プラス新しい顧客拡大をすればおのずと売上げは上がる。あらゆる面で頭を悩まされたのが二階であった。業界の特色が出ている多品種少量生産の典型的なフロア、一、三階両方の商品の特色を備えたフロアで商品知識及びセンスを特に重視されとても展開が難しかった。その頃の私には悪条件の中でフロア構成及び商品構成をいかに効果的にしていくかという裁量

がなかった。

そこで二階の分析から始め、その結果、客層としてはビジネスマンが主体であるということが分かり、ビジネス・経済書を基盤とし、売上げを見込み力を注いだ。しかし、ビジネス書などでは頭打ちであり、今以上の売上げを上げていくためにはビジネス書などに何か上載せざる商品が必要であった。つまり人文書の改革が要求された。しかし、人文書と言ってもどの分野の何をターゲットにすべきか、雲をつかむようなものであった。

そこで、まず他の競合店へ何度も足を運び、それぞれに特徴を生かした店づくりや棚構成をしていることを学んだ。当店も他の競合店がやっていない、独特な店づくりをしたいと思った。それから、少しでも変革していくための参考になるものを探しに上京し主要書店を見学した。しかし、あまりの規模の違いに困惑するばかりであった。

ただそこには私を変える大きな出会いがあった。それは、「今泉棚」である。リプロ池袋店、今泉正光氏が独自の棚組みで現代思想などのマニアックな本を見識の広さと深さで構成していたものである。この棚には目を見張

るものがあり、「私が求めていたものはこれなんだ。」と確信した。

この今泉棚を参考にまずは模倣から始めていこうと決意した。広島他の競合店でもまだ力を入れておらず、難しい分野であるが、早速得たものを広島へ持ち帰り、再現することにした。しかし、頭で描いたような同じものが出来るはずがなかった。つまり大型店のように「なんでもある」という図書館的発想をしていたので、棚の各分野の割り振り、本の冊数に対するスペースの問題が起きて来たからである。小さな街の書店や駅ビル、小規模の郊外店などでは、文庫・雑誌などを中心に展開し人文書を考える必要はない。また、リプロ池袋店などの八百坪前後の大型店ではあらゆる分野あるいは、あらゆる商品に棚を贅沢に使うことができる。しかし、店のように中規模の店では大型の店舗と同じような商品構成をしていけば、自ずと矛盾が出てくるのはまちがいない。小型店には小型店のやり方、大型店には大型店のやり方がそれぞれにある。独自の商品構成あるいは売れ筋の本を置くということは、中型店は他の規模の店よりも特にシビアで難しい。しかし、人文書の売上げ、返品などの

効率が良いのは、統計として中型店が良いとでている。そのことを念頭に入れ『別冊宝島 現代思想入門Ⅰ・Ⅱ』（JICC）、『人文科学の現在』（人文会）など数々の文献を参考に「なんでもある」という考え方から必ず必要である書籍（定番）、良く売れる書籍（回転率の良いもの）を中心に独自の商品構成あるいは分類法を考え、読者が関心を示し興味がわく商品を置くように努力を重ねた。たとえば、独自の商品構成あるいは分類法の一つの例として個人的に系図や見取図が好きであるので、それらを利用して思想では、棚を外国と日本に二分割し、外国は当店をよく売れる著者フォーコーを中心とし、日本では吉本隆明を中心に棚を系図化した。また心理では、外国はフロイト、ユングを中心とし、日本では河合隼雄や小此木啓吾などを中心として系図化し商品構成した。それにより棚の流れができ、あわせてフロア全体も良い方に変化する。また、客もこちらが意図した方向（棚にそって）に流れる。それから、年々商品の分野別ボーダーライン（境界線）は、ファジィ化あるいはカオス化（混沌）してきている。だから人文書は、商品をどこに置くべきか難しい。しかしこのことを利用して変化のある

棚構成をし、分野に幅をもたせることが可能であると私は考える。

さて、人文書は、他の書籍に比べ、商品価値の評価に関して個人差がきわめて大きいように思われる。よって私個人としては一人でも多くの人に、商品を買ってもらいたいと思うが、不特定多数の読者をターゲットにするより、やはりマニアックな人間や、資料として書籍が必要な大学教授、大学生などに的をしぼった方が効率がよい。最近では男性しか買う人がいなかった方が効率がよい。本に、若い女性の読者が増えている傾向がある。中沢新一、浅田彰、柄谷行人などの現代思想などである。彼女たちにとっては今、これらがトレンドイなのであろう。このように固定客が来ると人文書は強い。例えば新刊には客の反応が非常に早く、すぐに売切れる。しかし、その一方では、固定読者層の選択をする眼はきびしく、つまらないものはほとんど動かない。ここで私が述べているつまらないものと言うのは、悪い書籍という意味ではなく、売行不良書である。また、一方で良い書籍と言っても売行良好書とはかぎらない。ここでいう売行書というのは、すべての書店での尺度で考えるのではなく、

ここでは個々の書店ということと考え、固定読者層にあった書店人の感覚というものが非常に大切である。

それから、人文書でも読者のブックデザイン（装丁）に対するこだわりが強い。そしてそれは売行きを大きく左右している。洪水のように押しよせる多くの本の中から一冊を選ぶときにおけるブックデザインのパワーはすばらしいものがある。昔ながらの箱に入ったかにも専門書というようなものは現在ではもう古いと感じる。内容がどうであれ、個人的には棚から一掃したい気持ちである。みずず書房のような白を基調にしたもの、あるいは、晶文社の装丁などや、売れっ子の菊池信義氏、未来社の「未来」の表紙デザインの戸田ツトム氏、そして平野甲賀氏、杉浦康平氏などのブックデザイナーが活躍しているが、彼らがデザインすると本が生き生きとしてくる。内容も勿論重要であるが、著者の知名度及び資格に訴えた装丁が非常に重要視されてきている。

このような要件をふまえて、書籍を選択し読者を一人でも多くつかんでいく必要がある。

しかし、一方では一九八九年二月号の「出版ニュース」で松本八郎氏が「昨今の『本づくり』の常識が、あまり

にも類型化されすぎていることに、最近では気になって仕方がない」として、編集者は出版者の本づくりへのかわりや問題にしている。「どこにも版元の出版ポリシーが、装幀からは見えてこない」「書籍、とりわけ文芸書を見ていると、編集者や出版者の本づくりへの関わりと思想がまるで見えてこないのである。揶揄すれば、出版社は商社と同じで流通販売だけに関わればよく、有能な製造会社（著者）とそれを包むパッケージ会社（装幀者）を抱えていれば、あとは、資本力と営業力さえあれば自然に商品が売れていく、という構造式なのである。」と指摘している。そして文末に「装幀上のポリシーを感じるのは『みずず書房』『晶文社』であり、装幀の一貫性が感じられるのは、文芸書では、『新潮社』『筑摩書房』である。」と述べている。そして、「装幀」はデザイナーの感性や個性に依存するのではなく、出版社のC Iの一環として捉えるべきだ。」と筆者は提案している。このことは、私が述べている「装丁」はデザイナーの感性や個性に依存するという観点から相反するものであるが、みずず書房、晶文社などについては、確かにC Iの一環として捉えて良いと思う。どちらにしても、書籍（人文書）

の販売には装丁が大いに関係してくることに間違いはない。このように、いくつかの要因によって今までの売上げの基盤に人文書の売上げがプラスされ、日々の売上げが伸びたのである。

人文書に限ることではないが、書籍は絶えず変化をしている。今までと同じことをしては読者に飽きられてしまう。そこでこれからの課題として、書店あるいは店員は、絶えず新しい風を吹き込んで、前向きに進み続けなければならない。最近では、テレビ、ラジオ、CDなどのメディアによる「若者などの活字離れ」に代表される、読書出版環境に変化が生じているのは確かである。

しかし、まだまだ業界は変わり、それによって書籍（人文書）は、やり方次第では今以上に売れると確信する。以前、私は書店とは「不思議の森」だと述べたことがある。「森には多品種な本の木があり、その木は、数多くの情報やあらゆる人生を教えてくれる。その森は、本の木と多くの人々を引き合わせる場である。その森から出たくないとか、再び、来たいと思ってもらうには、森の番人（店員）は、かぎりなく、試行錯誤をしなければ

ならない」と。典型的な多品種少量生産及び見込生産の業界で、一冊の本（人文書）を読者に結びつけていく書店の役割が相対的に低下している現在、本を販売する書店とそこで本を購入する読者が、一冊の本（人文書）によって結びつけられる点を考えてみると、書店員は今以上の知識向上と顧客ニーズに合わせた各店の独創性を追求していくべきだ。すると自然に読者は店につき店員につくと思う。つまり、店のカラーを完全に固め読者にアピールし、読者と店員との書籍（人文書）による共感により、書店また業界が活性化すると感じる。そして、なんとといっても書店を書籍という、ただ、モノを買う所と見なすのでなく、読者にアメニティ（快適さ）を提供する場所にしていく、そんな店づくりを追求していくべきである。そのためには、店の演出たとえば、間接照明を効果的につかう、今までにないディスプレイの仕方、あるいは個々の書店で重点商品に独自のコメントをつけ、客の購買欲をそそのめる、またフェアなどにはたえずパンフを作るなど、他にまだまだあるがそのような一つ一つが重要なポイントとなり、私はそのことに對し、あらゆる努力を惜しまないつもりである。

人にはどれだけの知識が要るか

— 哲学の存在理由 —

加藤 尚武

「人にはどれだけの土地があるか」というトルストイの童話では、結局、最後に必要な土地は、広大な所有地を求めて死んだ主人公の亡骸を埋める墓地だった。その墓地の値段だって近ごろでは馬鹿にならないという話をしようというのではない。

人にはどれだけの情報、人間関係、財産、能力、社会制度、自然環境が要るか。

このように問いを立ててみる。するとたちまち「人にはどれだけのカタログが要るか」ということも必要でしようという話に割り込んでくる手合いがいる。「必要な情

報のカタログ」、「必要な人間関係のカタログ」、「必要な財産のカタログ」、「必要な能力のカタログ」、「必要な社会制度のカタログ」、「必要な自然環境のカタログ」……「必要なカタログのカタログ」。切りがない。

だから最小限で済ませるとすると、墓地なみの知識として、「自分が死ぬ」という一事をわきまえていければいいということになる。哲学とは、必要な一事が何であるかを教える術である。「死を忘れるな。」ハイデガーの『存在と時間』が語っていることは、結局、「死を忘れるな。」そうすれば大衆社会のまっただ中で自分の存在を保って

生きて行けるだろうということだ。

「死を忘れるな」ととても近いところにあるのが念仏である。鈴木大拙の「日本の靈性」に描かれたような、念仏という一事にひたむきに従った人生を見ていると、そこに哲学が存在することは確かだと思う。念仏一箇の人生模様を集めたものに『近世往生伝集成』（山川出版社）など往生伝がいくつもある。これとピエティズムの伝記集と比較すると相違点よりも類似点の方が目立ってくる。西洋と東洋、日本人とキリスト教徒について語られてきた比較の定石はたいてい役にたたないということが分かる。西洋に自我があり、東洋に自我がないなどという話は作り話だ。西洋の自我主義なんて、「人間」と一緒に『老人と海』の最後の場面の巨大な鯨の死体のように浜辺に打ち上げられても不思議はない。

克服されるものは、たいてい初めから克服されやすくできている。

克服されることになっている思想のカタログ（かっこ内は、それを提唱したひと）を作ってみよう。非存在（パルメニデス）、ソフィスト（プラトン）、自力救済（アウグスティヌス）、隠れた性質（デカルト）、理性（ヒューム）、恥し

らず（ヴォルテール）、形而上学（カント）、道德感覺（ベンサム）、アトミズム（ヘーゲル）、階級社会（マルクス）、神（ニーチェ）、世界像（ハイデガー）、人間（フーコー）、ファルロシズム（デリダ）、スペシフィズム（ピーター・シンガー）、等々。「哲学史は阿呆の画廊である」という言葉は、ヘーゲルの哲学史の序論にあるのだが、ヘーゲル自身は「哲学史は阿呆の画廊ではないはずだ」ということを言いたかった。

カタログへの要求から学説史が生まれた。哲学史というのは、学説早分かりである。国づくし、動物づくし、道具づくしといった読み物への需要と、学説史への需要とは、ほんらい同じ性質のものなのだ。もともとは啓蒙主義から生まれた。わけても重要なのは国づくしであって、自分の国がどのような近隣の国にとりまかれているかという知識が、神や死よりもさきに必要な知識とされるようになったのだ。国づくしは、自己認識のひとつだった。

世界について知らなければ自己自身について知らない。

世界についての知識が「必要な一事」に組み込まれる

ようになった。博物学と博学とは、同じ精神が生み出すものだ。カタログ、博物学、データベースなどの二次情報へと人々の関心が移っていくのが、現代の特徴の一つだが、そこにひょっこり顔をだしている不安は、本当は必要な一事へのひたむきさでなりたつ靈性へのあこがれであるのかも知れない。あるいは、そのような精神の単純さへのかなりしたたかな決別であるのかもしれない。しかし、いずれにせよ必要な一事と世界の多様さとの緊張から抜け出す道はなくなった。

現代人は情報に飢えている。ソ連で八月に起ったできごとをわれわれは逐一知らされている。自殺未遂という悲劇を背負い込んだ女歌手の動静はすべて活字になっていくらしい。コインを臍の下に貼るだけですべての病気が面白いように直るということを書いた書物もある。情報に期待するのは、期待が満たされていないからだろう。情報を集め続けていけば、いつか満たされるのだからか。

私が本当に知りたいことは確実ではない。確実に知ることでできる知識は私の知りたいことではない。

明日の株価、明日のクーデタ、明日の大災害が分かれ

ば、大したもんだ。しかし、それは分からない。確実に分かることは、あしたの天気が晴れか晴れでないかということである。カードをめくって出る目の数は、1、2、3のどれかであるか、どれでもないかのどちらかである。100%確かな知識は100%無意味な知識である。

私は誰と結婚することになるのか。私は金持ちになるのか。私はどのようにして死ぬのか。私が本当に知りたことは、私が確実に知ることのできることはない。

人間は何を確実に知ることができるのか。

一つ目の答え。何も確実に知ることにはできない。舟底一枚下は地獄。神のみぞ知る。明日は明日の風が吹く。一寸先は闇の闇。天地の造り主の神、山の神、海の神、あらゆる神々にわれわれの運命は委ねられている。神に従うことより他に正しい生き方はない。神のみが本当の存在なのであり、人間はたまたま今、ここに集まった塵の姿、土の器にすぎない。風吹けば消える炎の命かな。真なる存在を前にして、時間的世界の造り主を前にして生きることに、それは自己の否定こそが唯一の真理につながる自己の存在であることを知ることなのである。

二つ目の答え。何も確実に知ることはできない。神の存在すらも知ることはできない。だからわれわれは自分の魂をつまらぬ煩いから解き放つように心がけなければならぬ。情に竿させば流される。しかし関心というものはすべて一つの情であり、意地である。意地を通せば窮屈だ。通さなくても窮屈だ。だから関心を控えることが大事だが、関心を控えることも関心なのである。そこで関心を控える訓練という業が必要になる。解脱への道が修煉である。

三つ目の答え。われわれが確実に知ることのできる領域は限られている。それと確実に知ることのできない領域を区別しなければならぬ。確実に知る働きを理性と呼び、われわれの生きる生き方をこの理性に従うようにしようではないか。理性的な知識と理性的でない知識を区別するためには理性的知識が必要である。われわれの心の中に前もって存在する理性に気付き、目覚めることが、本当に生きるための第一歩である。生まれつきの理性がどのようにしてわれわれの心に宿ったかを理性的に説明することはできない。理性には理性の神話がある。理性は、見かけと本質を区別する。虚偽と真理を区別す

る。かりそめの存在と永遠の存在を区別する。要するに知識について本物と偽物を区別する。そして真なるもの・本物に従う。このようにして理性は良心に従う。

四つ目の答え。確実に知ることのできるのは、論理学、幾何学、数学の命題に限られる。それらは言語の形式と深く結びついた知識であって、人間の経験の生きた領域とは直接は触れ合わない。これらの形式的真理がどのような一般的構図をもっているかを明らかにすることができる。この形式的真理を計算の機械に置き換えることもできる。しかし、形式的真理の全てを矛盾なく取り込むことができる。だから経験は確実な知識を傍らに置いて、自分なりに生きる術を工夫しなければならぬ。だれも自分こそは理性的な真理の持ち主だという権利を持たないのだから、われわれはお互いに生身の人間としてのあり方を正直に認め合って生きて行くのがいい。誰もが ある程度は打算的であることを認めよう。聖人君子の道徳だけが道徳であるのなら、われわれの世界には道徳が何もないという恐ろしいことになる。

これらの答えが、キリスト教、仏教、理性主義、経験

主義なのだというと、どこからも苦情が出る。おれはもっとましなことを言っていると聞いたがる。しかし、もっときびしい批判が筆者のところに来るのではないだろうか。カタログを作らない、必要な一事を明らかにするという精神が哲学ではなかったのかと。とんでもない。初心は忘れていない。

確かに知ることのできるものは何かという一事こそ哲学の根本問題であり、人間にとってもそうだ。大きな財布を無くしたとき、あきらめる、古い師にみて貰う、自分がしつかりしなくちゃと身を引き締める、情報を集めて判断するという態度カタログの内のどれかを貴方は自然に選んでる。確かに知ることのできるものは何か。それが問題だからこそ、女心と秋の空、世の中は三日見ぬ間に改革派。桜が咲くか、赤旗が散るか。情報が流れれば、情報を評価しなければならぬ。評価するには尺度が要る。しかし、知識の尺度は知識である。

哲学は情報の尺度の学である。

哲学に、他の科学・芸術などとの領域の区別はない。ただ、次元の区別がある。すなわち尺度を問題にすることから、別の次元が、おのずと問題になる。

プラトンは、ピタゴラス派の数学やエジプト、メソポタミアから伝来していた幾何学のなかに確実な知識の原型があるに違いないと考えていた。「善とはなにか」、「知識とは何か」というような定義の形をした知識のなかに、幾何学の定義や定理のような、誰もが生まれつきもっている絶対に確実な知識があると考えた。たとえば「三角形」 \parallel 「内角の和が二直角」のように、純粹な本質から確実にその性質を導き出すことができる。そしてこの純粹な本質を「イデア」と呼ぶことにした。

英語の「アイデア」(觀念)もここから来る。私の心にすてきなアイデアが浮かんだとき、その作者が私で、私に知的所有権があるというのは、プラトンのではない。アイデアというのは別世界から彗星のように飛び込んでくる。だから本当の知識に所有権はない。ソフィストという知識を金に替える人々がいて、彼等とプラトンは戦ったわけだが、その論争は裏を返すと知的所有権論争だった。

ユークリッドの幾何学の体系ができるのが、時期的にはプラトンやアリストテレスの後になるのだが、すでにプラトンにとって幾何学の定理は完全な知識のサンプル

だった。近代になるとヒューム、カントにとつてはニュートン力学が、完全な知識のサンプルになった。現代では話がこみ入ってきて、アインシュタイン以後まで含めて自然科学、とくに物理学の確実性の構造を明らかにすることが、数学を含む形式的論理の構造を明らかにすることが平行して進められている。

カントには、ニュートン力学が経験に依存しないプラトンの論理（アプリアリの形式）と結合していることが明らかにされて、永遠の数学と同じだけの確実性をもつ永遠の物理学を描き出すことが可能ではないかと思われていた。まったく内容のない形式、 $A \parallel A$ と同じ同語反復だけが、経験に依存しない確実な知識なのだと思えば、ニュートン力学が永遠の真理であることを明らかにすることができない。また、道徳法則の普遍妥当性を明らかにすることもできない。だから、形式的な真理と同じだけの確実性があったとしても無内容ではないような知識の形があるはずだとカントは考えた。それが「先天的総合判断は可能か」という問いで表現された。

究極の確実な知識が存在することは確かだが、カントではそれが総合判断でなければならない。「アプリア

リの総合判断の可能性」という問題はしかしとても古い。

哲学史はプラトンの注釈にすぎない。（ホワイトヘッド）

正義、善、美というような価値の本質は、幾何学が語る純粋な三角形とおなじようにアプリアリの真理なのだという考え方は、プラトン主義と呼ばれているが、結局は、「先天的で純粋で絶対確実な知識あるいは観念が存在する」という立場はすべてプラトンの影のなかに包まれる。

確実な知識とはなにか、真理の基準はなにかという問題を考えて行くと、心の中に必ず真理の尺度になるものが存在するはずだから、心の中を調べれば分かるはずだという立場がでてくる。心で心を見ること、すなわち内観が真理の判定者となりうるか。アプリアリの総合判断は、この内観を介して可能になるか。

心の内側に入ってくるものを調べることによって、知識の組み立てを明らかにすることが出来るかもしれない。だから内観という方法で、外からくる感覚的な知識と前からいるアプリアリの知識と、それぞれの本質を

明らかにすればいいという考え方が出てくる。これはしばしば現象学的方法と呼ばれる。心に映り行く、移り行くよなしごとを、心にとどめて調べようという訳である。

あらゆる知識の根源は一つであるか。

それは確かに「こころ」と呼ばれる番人の前を通るのか。番人に気付かれることなくすり抜けて行く無意識があるかもしれない。習慣となった意識は注意という番人を眠らせて通り抜けていく。そのうえ番人の前の通路以外の通路があるかもしれない。

現象学者はこう主張する。心という番人の前をたまたますり抜ける意識はあっても、心という番人に絶対見えないものでしかも心の中に住み着くものはないはずだ。それが在ったとしても、その存在が意識されるはずはない。だから存在しない。

素人は意識されなくても存在するものはいくらでも存在と思う。忘れてしまった封筒のなかの短い言葉と札束。まだ開いてみないバナナの中身。現在存在するものは意識されてなくても存在する。もちろん、来年のボージョレの味、まだ解かれたことのない方程式の答えにつ

いては、分からない。それは存在しないかもしれない。亡くなった恋人の「来年はもうお目にかかれません」という言葉、彼女の指先や愁いを帯びた眉毛、それらが存在するかどうかは分からない。しかし、現在について存在と意識は重ならない。

現象学者は、心とは存在と意識が重なり合う場なのだから、

素人は、科学はどのくらい信用できるか、究極の尺度はあるかと疑ったとき、心などというヤワなものでは話にならないと思う。心では意識と存在が重なり合うとすれば、心には来年のボージョレの味も存在するのだろうか。

あらゆる知識の源泉、入口、置き場所として、心という場を想定し、観念という形、表象という図柄、あるいは言葉とか概念が、そこで吟味されるという営みがなされるという哲学的なお話は、どんなに旨く作っても作り話である。

知識を分類して、論証の学、実証の学、合意の学、趣味の学と分けた上で、それらをまとめて吟味する学が哲学だと哲学者は言いたくなる。すると意地悪な反哲学者

が、その分類には賛成だが、哲学そのものは趣味の学に入るはずだという。最後に笑うものがいちばんよく笑う。最後に分類するものがいちばんよく分類する。しかし、論証、実証、合意、趣味という分類そのものは、論証でも、実証でも、合意でもない。強いて言えば趣味でしようという訳だ。

カタログのカタログは、どのカタログに載っていますか。

「ここに載っています。それが人間のあたりまえの心の状態です。忘れものをした場所を思い出すには、自分の現在の心しか抛り所がない。それと同じように、いつも最後の抛り所となる心があります。その心と同じ形をした奇妙な学問を作っておいて、そこに少ししな記憶装置を連動させておくんですよ。それが哲学です。」

哲学は、一人前で食べられるだけの知識に世界全体の知識を要約しなければならない。あらゆる知識と文化の遺産を、だれでも個人で利用できるようにやさしく短くすること、必要な真理だけを抜き出すこと——それは哲学の本来の使命だった。学問そのものと同じ値打をもった一人前用の知識の集約だった。早分かり、やす分かり

こそ哲学の使命だった。カントは地理学で「世界国づくし」を語り、ヘーゲルは美学で「演劇ダイジェスト全集」を語り、デカルトは光学で眼鏡の作り方概論を語った。これこそ本当の哲学だ。

哲学という領域はない。哲学という次元がある。しかし、それは日常的な経験の次元と最高の学問の次元との媒介という営み以外に自分独自の次元をもつわけではない。

一人分の土地に全ての土地の産物を載せることはできない。しかし集約の方法はある。

知識の限界づけと分類。われわれは舟の中にいて舟の全体図を作成している。ときどき舟の外から見るということはできない。

知識の基礎づけと吟味。このことの意味を哲学者自身が誤解した。経験の次元と学問の次元を媒介することが哲学の仕事で、本気になって「基礎づけ」を試みれば、自分は最初から絶対確実な知識をもっているというウソをつかなければならなくなる。

学問の歴史。学問そのものは古い知識をごみ箱に捨てながら走り去っていく。「捨てられた過去の知識はどの

ような特性をもっていたか」というゴミ学を哲学が引き受ける。昔の観念という、動かなくなつて捨てられた時計を復元して動かして見る。哲学は、観念の博物学も営業している。

哲学者は、しかし、博物学の仕事が終わつてから、現在の知識に取り組むのではない。現在の問題（新規素材）に取り組んで、そこに博物学（ゴミ）をぶちこんで、「今までの人間の知識。ハイ、一人前」と叫ばなければならぬ。

例えば昔の哲学者が「人間とは何か」という形で考えていた人間学の領域には、サル学方面から、人間と動物の違いという問題、コンピュータ学の方面から、人間と機械の違い、生命倫理学の方面から判断能力の有無と自己決定の権利との関係というようなテーマが入ってきている。

文化人類学、歴史学、科学史の方面からは、真理や正義の尺度が時代や文化によって違つてくるという相対主義の問題が出されている。

現在の人間が環境を破壊し、資源を使い尽くすことで未来の人間から生存可能性を奪つてしまうという犯罪は

どの様にしたら防止できるかという環境倫理学の問題から、意志決定システムの時間構造（通時性と共時性）という問題が、テーマになってきている。

哲学的な問題のカタログは、プロの哲学者の間では作つておいた方がいい。

問題を列挙すると切りがないという人がいる。カタログを作れば切りがない。切りのないことがらに切りをつけること、無限の問題に有限の表現をあたえること、それが哲学である。それができないと、人にはどれだけの知識が必要かという問いに哲学が答えられなくなる。

哲学とは無限を有限化する努力である。（終わり）

●文献リスト

〈哲学一般〉

- ・キルケゴール『死にいたる病／現代の批判』白水社
- ・ワイトゲンシュタイン『哲学的考察』大修館書店
- ・ガブリエル・マルセル『存在と所有・存在と不滅』春秋社
- ・加藤尚武ほか編『講座ドイツ観念論（1〜5）』（ドイツ観念論前史）カント哲学の現代性／自我概念の新展開／自然と自由の深淵／ヘーゲル——時代との対話 弘文堂
- ・ヘーゲル『精神の現象学』（全一冊）岩波書店
- ・ヘーゲル『懐疑主義と哲学との関係』未來社 ※加藤尚武は

か訳

- ・クエンティン・スキナー編『グランドセオリーの復権』産業図書 ※加藤尚武ほか訳
- ・大森荘蔵『流れとよどみ』産業図書
- ・F・M・コーンフォード『宗教から哲学へ』東海大学出版会
- ・B・ラッセル『西洋哲学史』（全三巻）みすず書房
- ・生松敏三ほか編『西洋哲学史の基礎知識』有斐閣
- ・田中仁彦『デカルトの旅／デカルトの夢』岩波書店
- ・Ch・ヤメ、O・ベグラー編著『ヘーゲル、ヘルダーリンとその仲間』公論社

〈哲学各論〉

- ・大森荘蔵ほか『「心一身」の問題』産業図書
- ・野田又夫『哲学の三つの伝統』紀伊國屋書店
- ・ブーバー『ユートピアの途』理想社
- ・シモーヌ・ウエユ『抑圧と自由』東京創元社
- ・W・v・クワイン『ことばと対象』勁草書房
- ・加藤信朗『初期プラトン哲学』東京大学出版会
- ・マイケル・ダメット『真理という謎』勁草書房
- ・廣松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房
- ・村上勝三『デカルト形而上学の成立』勁草書房
- ・菅野盾樹『我、ものに遭う』新曜社
- ・H・ヒールズ編『解釈学とは何か』山本書店
- ・マーヴィン・ミンスキー『心の社会』産業図書

- ・大森荘蔵『新視覚新論』東京大学出版会
- ・フィヒテ『全知識学の基礎・知識学梗概』溪水社
- ・ハーバーマス『認識と関心』未來社
- ・加藤尚武『ヘーゲル哲学の形成と原理』未來社
- ・坂部恵『ベルソナの詩学』岩波書店
- ・パスカル『パンセ』白水社
- ・清水義夫『記号論理学』東京大学出版会
- ・野本和幸『現代の論理的意味論』岩波書店
- ・ホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』岩波書店
- ・アイブルIIアイベスフェルト『愛と憎しみ』みすず書房
- ・シドニー・シュローメーカー『自己知と自己同一性』勁草書房
- ・滝浦静雄『「自分」と「他人」をどうみるか』日本放送出版協会
- ・S・シューメイカー、R・スウィンバーン『人格の同一性』産業図書
- ・D・ヒューム『人間知性の研究』哲書房
- ・ヘーゲル『自然哲学』（上・下）未來社
- ・共筒俊彦『神秘哲学』（二冊）人文書院
- ・J・ヤコビ編『バラケルスス 自然の光』人文書院
- ・ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊國屋書店
- ・T・クーン『科学革命の構造』みすず書房
- ・ポパー『科学的発見の論理』（上・下）恒星社厚生閣
- ・M・ヘッセ『科学・モデル・アナロジー』培風館

- ・H・ブラウン『科学論序説』培風館
- ・J・モノー『偶然と必然』みすず書房
- ・ハイゼンベルク『現代物理学の思想』みすず書房
- ・P・K・ファイヤアーベント『方法への挑戦』新曜社
- ・パオロ・ロッシ『魔術から科学へ』サイマル出版会
- ・ヴェド・メータ『ハエとハエとり壺』みすず書房

〈言語学〉

- ・B・L・ウォーフ『言語・思考・現実』弘文堂
- ・飯田隆『言語哲学大全』(I・II) 勁草書房
- ・J・L・オースティン『言語と行為』大修館書店
- ・フリーコー『言語表現の秩序』河出書房新社
- ・テリー・ウィノグラード『言語理解の構造』産業図書
- ・N・チョムスキー『ことばと認識』大修館書店
- ・廣松渉『もの・こと・ことば』勁草書房
- ・C・オグデン、I・リチャーズ『意味の意味』新泉社

〈倫理学・人生論〉

- ・アマルティア・セン『合理的な愚か者』勁草書房
- ・カント『実践理性批判』以文社
- ・カント『道徳形而上学の基礎づけ』以文社
- ・和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店
- ・J・L・マッキー『倫理学』哲書房 ※加藤尚武監訳
- ・W・K・フランケナ『倫理学』培風館

- ・ピーター・ウィンチ『倫理と行為』勁草書房
- ・加藤尚武『バイオエシックスとは何か』未來社
- ・H・T・エンゲルハート、H・ヨナス『バイオエシックスの基礎』東海大学出版会 ※加藤尚武ほか訳
- ・エンゲルハート『バイオエシックスの基礎づけ』朝日出版社
- ・神谷美恵子『生きがいについて』(神谷美恵子著作集1) みすず書房
- ・茂手木元蔵訳『セネカ道徳論集』東海大学出版会

〈美学〉

- ・パノフスキー『イコノロジー研究』美術出版社
- ・バウムガルテン『美学』玉川大学出版部
- ・ゾルガー『美学講義』玉川大学出版部
- ・中井正一『美と集団の論理』中央公論社
- ・ハチスン『美と徳の觀念の起原』玉川大学出版部
- ・金田晋『芸術作品の現象学』世界書院
- ・クリパンスキほか『土屋とメランコリー』晶文社
- ・粉川哲夫『カフカと情報化社会』未來社

〈思想史一般〉

- ・大河内一男ほか編『世界の名著』(全六十六巻・35ヘーゲル) 46ニーチェ) 49フロイト) 50ウェーバー) 55ホイジンガ) 中央公論社・手塚富雄ほか編『世界の名著(続)』(全十五巻・2プロテイノス) ポルピュリオス) プロクロス) 7ヘルダー

／ゲテ）中央公論社

・伊藤整・井上光貞ほか編『日本の名著』（全五十巻・7道元）
21本居宣長）33福沢諭吉）40徳富蘇峰）山路愛山）42夏目漱
石）森鷗外）43清沢満之）鈴木大拙）47西田幾多郎）中央公
論社

・井上忠・山本巍編訳『ギリシア哲学の最前線』（I・II）東京
大学出版会

・フィリップ・アリエス『死と歴史』みすず書房

・M・リーデル『市民社会の概念史』以文社

・五十嵐一『知の連鎖』勁草書房

〈日本の思想〉

・子安宣邦『伊藤仁斎』東京大学出版会

・野崎守英『道——近世日本の思想——』東京大学出版会

・鈴木亨『響存的世界』三一書房

・斎藤忍随『幾度もソクラテスの名を』（全二巻）みすず書房

・坂部恵『かたり』弘文堂

・加藤尚武『二一世紀への知的戦略』筑摩書房

〈アジアの思想〉

・大濱皓『中国・歴史・運命』勁草書房

・中村元『インド思想史』岩波書店

・矢島羊吉『空の哲学』日本放送出版協会

〈ヨーロッパ・アメリカの思想〉

・鈴木幹也『エンペドクレス研究』創文社

・A・O・ラヴジョイ『存在の大きいなる連鎖』晶文社

・清水哲郎『オッカムの言語哲学』勁草書房

・久保元彦『カント研究』創文社

・岩崎武雄『カント「純粹理性批判」の研究』勁草書房

・高橋義人『形態と象徴』岩波書店

・量義治『宗教哲学としてのカント哲学』勁草書房

・ドント『知られざるヘーゲル』未來社

・ヘーゲル『大論理学』（全三巻）以文社

・H・J・ペイトン『定言命法』行路社

・清水禮子『破門の哲学』みすず書房

・ヘーゲル『ヘーゲル教育論集』国文社

・アレクサンドル・コジェーヴ『ヘーゲル読解入門』国文社

・加藤尚武編『ヘーゲル読本』法政大学出版局

・S・アヴィネリ『ヘーゲルの近代国家論』未來社

・テオドル・H・アドルノ『三つのヘーゲル研究』河出書房
新社

・坂部恵『理性の不安』勁草書房

・ハーバーマス『理論と実践』未來社

・シャルル・フーリエ『四運動の理論』（上・下）現代思潮社

・デイドロ『哲学』（I・II / デイドロ著作集）法政大学出版局

・ライプニッツ『人間知性新論』みすず書房

・ピエール・ベール『歴史批評辞典』（I）III / ピエール・ベール

ル著作集〕 法政大学出版局

・ M・シュテイルナー『唯一者とその所有』(上・下) 現代思潮社

・ ヴォルテール『歴史哲学』 法政大学出版局

・ A・スミス『道徳情操論』(全二冊) 未來社

・ D・ヘンリッヒ『現代哲学の遠近法』 岩波書店

・ K・クラウゼヴィッツ『戦争論』 徳間書店

・ M・ブーバー『我と汝・対話』みすず書房

・ ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』 筑摩書房

・ ロラン・バルト『零度の文学』 現代思潮社

・ オルテガ『オルテガ 大衆の反逆』 白水社

〈現代思想〉

・ A・シュミット『マルクスの自然概念』

・ E・アディッケス『カントと物自体』

万葉の風土と歌人

万葉歌人と自然景観
犬養 孝編 ●定価3,880円

探訪 日本書紀の大和

古代の息吹き・大和路散策
鶴井忠義著 ●定価1,980円

下着の流行史

下着にみる時代と風俗
青木英夫著 ●定価2,880円

増補改訂 ポーランド音楽史

もうひとつのポーランド
田村 進著 ●定価2,950円

音の文化誌

聴覚文化の東西比較
佐野清彦著 ●定価1,980円

鉄の文明史

鉄にまつわる壮大なロマン
窪田蔵郎著 ●定価1,980円

日本名茶紀行

日本のティーロード
松下 智著 ●定価1,980円

●価格はすべて税込みです。

雄山閣 千102 東京都千代田区
富士見2/ 振替・東京3-
1885/ 03-3282-3231

- ・ E・マッハ『時間と空間』
- ・ D・ヒューム『奇蹟論・迷信論・自殺論』
- ・ G・ショーレム『ユダヤ神秘主義』
- ・ B・マンデヴィル『蜂の寓話』
- ・ ガタマー『真理と方法』(I・II・III)
- ・ E・レヴィナス『時間と他者』
- ・ D・ヘンリッヒ『フィヒテの根源的洞察』
- ・ フィヒテ『フランス革命論』
- ・ A・コイレ『ガリレオ研究』
- ・ T・クンナス『精神の売春としての政治へニーチェ哲学における政治的なもの』
- ・ W・シュルツ解説『フィヒテリシエリング往復書簡』(以上ウニベルシタス叢書) 法政大学出版局
- ・ 坂部恵『仮面の解釈学』 東京大学出版会
- ・ 廣松渉『共同主観性の現象学』 世界書院

- ・メルロリボンティ『知覚の現象学』(全一巻) みすず書房
- ・フッサール『内的時間意識の現象学』みすず書房
- ・渡辺二郎『内面性の現象学』勁草書房
- ・渡辺二郎『ニヒリズム』東京大学出版会
- ・メルロリボンティ『見えるものと見えないもの』みすず書房
- ・滝浦静雄『メタファアの現象学』世界書院
- ・メルロリボンティ『眼と精神』みすず書房
- ・フッサール『イデー』(I・II・III) みすず書房
- ・フッサール『現象学の理念』みすず書房
- ・サルトル『実存主義とは何か』人文書院
- ・サルトル『存在と無』(1・2・3) 人文書院
- ・ハイデッガー『存在と時間』(上・下) 勁草書房
- ・渡辺二郎『ハイデッガーの実存主義』勁草書房
- ・渡辺二郎『ハイデッガーの存在思想』勁草書房
- ・アンスコム『インテンション』産業図書
- ・ジョン・サール『言語行為』勁草書房
- ・飯田隆『言語哲学大全II』勁草書房
- ・イアン・ハッキング『言語はなぜ哲学の問題になるのか』勁草書房
- ・G・ライル『心の概念』みすず書房
- ・藤原保信ほか編著『ハーバースと現代』新評論
- ・大庭健『はじめての分析哲学』産業図書
- ・K・ポパー『開かれた社会とその敵』(第一部・第二部) 未来社

- ・K・ポパー『歴史主義の貧困』中央公論社
- ・マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』河出書房新社
- ・芝田進午『人間性と人格の理論』青木書店
- ・D・マクレラン『マルクス主義以前のマルクス』勁草書房
- ・フーコー『知の考古学』河出書房新社
- ・フーコー『臨床医学の誕生』みすず書房
- ・J・クリステヴァ『ことば、この未知なるもの』国文社
- ・菅野盾樹『メタファアの記号論』勁草書房
- ・ロラン・バルト『モードの体系』みすず書房
- ・デリダ『グラマトロジーについて』(上・下) 現代思潮社
- ・トマス・ネーゲル『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房
- ・G・ペイトソン『精神と自然』思索社
- ・大庭健『他者とは誰のことか』勁草書房
- ・坂部恵『和辻哲郎』岩波書店
- ・永井均『(私)のメタフィジックス』勁草書房
- ・S・J・グールド『個体発生と系統発生』工作舎
- ・J・E・ラヴロック『地球生命圏』工作舎
- ・J・C・エックルス『脳の進化』東京大学出版会
- ・H・マルクーゼ『一次元的人間』河出書房新社
- ・森岡正博『生命学への招待』勁草書房
- ・ヴィクトル・フアリアス『ハイデガーとナチズム』名古屋大学出版会

・ハーバーマス『ポスト形而上学の思想』未來社

〈宗教学〉

・山折哲雄『靈と肉』東京大学出版会

・ヘーゲル『宗教哲学』（全三冊）岩波書店

・A・アウグスティヌス『三位一体論』東京大学出版会

・山折哲雄『宗教思想史の試み』弘文堂

・J・B・ラッセル『魔術の歴史』筑摩書房

〈その他の宗教〉

・井筒俊彦『イスラーム文化』岩波書店

・五十嵐一『イスラーム・ルネサンス』勁草書房

加藤尚武（かとう・ひさたけ）

一九三七年、東京生まれ。

一九六三年、東京大学文学部哲学科を卒業。

一九七二年、東北大学文学部助教授。一九八二年、

千葉大学文学部教授、現在にいたる。

著書、『ヘーゲル哲学の形成と原理』（一九八〇年、

未來社）、『精神現象学入門』（共著、一九八三年、有

斐閣）、『バイオエシックスとは何か』（一九八六年、

未來社）ほか。

訳書 R・ブプナー『弁証法と科学』（共訳、一九八三年、未來社）、ヘーゲル『懐疑主義と哲学との関係』（共訳、一九九一年、未來社）、など。

図書館で考える

市川市立図書館長 小川俊彦

図書館員であること

「図書館員になって良かったな、と思ったことがあったとしたら、その理由はなんですか？」

それまで、図書館の面積だの、書庫の大きさ、といったことを聞かれていたのに、突然の方向転換の質問に、一瞬答えをつまらせてしまった。

本が好きだ、という以外には大した使命感も持たずになった図書館員ではあるが、この仕事が嫌いになったことはないし、他の仕事にトラバニューしてみたいと考えたこともなかった。つまり、図書館員でいることがあたり

まえでしかなく、格別自分の仕事のことをあれこれ考えていなかったせいかもしれない。

しかし、質問され、改めて考えてみると、図書館は不思議な魅力を持っていて、多くの人を図書館に引き付けているのである。新聞記者、カメラマン、映画製作者、建築家、蘭の栽培者、主婦、そして出版界にもいる私の友人、知人など、必ずしも図書館を利用している人ばかりでもないのに、図書館が好きで手弁当で応援してくれている。ひょっとすると、図書館員自身がその魅力に気が付いていないということ、その質問を受けて思いし

らされたのである。

図書館の実態

夏休みはこの図書館も人であふれる。いまでも、マスコミは八月下旬の学生の入館待ちの行列を取りあげるが、サラリーマンにも夏休みが増えたせいか、図書館を利用するのは学生ばかりではなくなってきた。ことに、八月の中旬は首都圏から人がいなくなったといわれていたが、図書館はそんな時期でもけっこう家族連れが多かった。暑い時期、遠出をするあてのなくなった人たちは、涼しい図書館で夏休みを楽しもう、と考え出したのかもしれない。

世間が休みの時にもせよと働くのは因果な仕事なのか、働きがいがあるといったいいのかわからないが、図書館はやってますか、という電話がひっきりなしにかかってくるところを見ると、夏休みは意識のうえでもかなりひろがっているな、と妙なところで感心したりしてしまう。ただ困るのは、出版界も機能を停止するし、食堂なども休んでしまい昼食が不便になってしまうことである。

しかし、この時期の図書館は、人が多いといっても、

のんびり図書館で時間をつぶし、本や雑誌を利用して人々なので、図書館が忙しいという実感は少ない。図書館に忙しさと、喧騒が戻ってくるのは、八月も二十日過ぎからである。宿題をかかえた小学生たちとその親、中学生、高校生が、目の色をかえて図書館に押し寄せてくるのである。

図書館で調べものをするという習慣は望ましいし、ぜひ身につけて欲しいと願っているが、この傾向は夏休みだけである。しかも、小学生にとっての宿題は親のほうにしか身につかないのではないか、といえるほど親が一生懸命に調べているのである。次から次と、同じような紙を持ってやってきて、片っ端から本をひっくりかえし、行ったり来たりうろうろし、図書館員に聞いてくる。宿題は、ある設問に対して答えを書くという形式のもので、何年たってもほとんどその傾向は変わらない。B4二ページびっしりと、文学者と作品を結びつけるという宿題を持って現われた小学生のお母さんにもお目にかかった。子供向きの百科事典などででていないものも多く、親でも簡単には解らないものもあるためか、子供は傍らで本を読んでいて、お母さんだけが一日汗をかい

ていた。

付き添いの親が現われた時は大体が同じようなことになるが、宿題は数をこなせばいいというものでもないし、辞書に載っていることを丸写しにすればそれでいいものでもないはずである。しかし、クイズみたいに答えを探すだけで、そのことを憶えるわけでもないし、そこから発展させて次の疑問に向かっていくわけでもない。どう考えても、夏休みをただ遊ばせるわけにはいかない。ので宿題を与えている、といった感じがしてならない。だから宿題を出すほうは、量がふえればふえるほど、その答えは単純明解、つまり辞書で説明してある程度のものでないと、採点が大変になると考えるのではないのだろうか。

こんな勉強のしかた、させかたでは、いつまでたっても辞書を使いこなせる人間にはなりそうもないし、丸写しは頭に入らないばかりか、コピーを氾濫させるばかりである。書き写していくのはせいぜい小学生で、まさかそのまま学校に提出しているのではないと思っっているが、中学生になればほとんどがコピーをとっていく。受験戦争と〇×式の弊害としか考えられない。

本を使いこなせない学生

本は読まなくなった、売れなくなった原因を、こんなところに求めるのは間違っていると言われるかもしれないが、辞典類を含めて本を使いこなせない、読書に楽しみを見いだせない人々が、どうして読書家になり、本を買ってくれるだろうか。

本誌の昨年六月号に豊田恭子さんが「アメリカの図書館」を書かれているが、大学ではたくさんの文献を読み、レポートをまとめていかなければならない、と報告しています。私自身も、ある大学のゲストハウスに泊めていただいた時、土曜日の夜十一時近かったにもかかわらず、図書館では大勢の学生が勉強しているのを見たことがある。試験期間でもないのになぜ、と聞いたら、自分の自由になる土曜、日曜に文献を読んでおかないと、卒業もおぼつかないからです、という返事だった。

しかし、こういった勉強のしかたは大学生だから、というのではなく、小学生の頃から行なわれているようである。疑問にぶつかったら図書館に行って、図書館員に相談しながら調べを進めていって、自分が最も求めているものを見つけたしていく、という姿勢は小さいうち

にできている。たとえば、カニグズバーグの『クロウディアの秘密』の中で、二人の姉弟はニューヨークの中央図書館に調べにいっているし、カール・セーガンの『コスモス』にも少女が近くの大学図書館で円周率のことを調べだしている。どちらも本来の利用者でないのに、きちんと応対してもらったことがうらやましくて、妙に印象に残った場面である。日本なら多分門前払いになるだろうからである。図書館を利用する側も、される側も、図書館という機能をいかにきちんと理解し、調べるということをいかに大切にしているか、がよく解る事例である。

調べ、自分の頭で考え、そしてレポートをまとめていく、という作業は、大学生になったからできるというものでないことは、日本の大学や短大の図書館員が一番痛切に感じている。毎年、新生に図書館の使い方を教えなければならぬのである。公共図書館が充実してきているので、本を借りる手続き程度のこととはわかっていても、目録で検索していったって、索引や抄録を使いこなしてレポートを書ける新入学生はいない。それどころか、卒論がない短大の学生は、レポートのために一度も目録や

書誌、索引類を使うことがない、とさえ言われているのである。

これを「今時の学生は！」と、学生の責任にすることは簡単なことである。でも、事實は本の生きた使い方や図書館の使い方を教えてこなかった側にあることは、これまで書いてきた通りである。そしてそれが間違いないことは、学校図書館の学校での位置づけ、図書購入費、授業での生かされ方をみてみればよく解る。図書館はあくまでも附属物ではない。それどころか大学でも今もって附属図書館と名乗り、大学における学問研究の中心機関とは位置づけていないところも多い。

これではきちんとした予算もつけてもらえず、必要な資料や情報を集めて、それを必要としている人々に提供できる態勢はとれない。本も少ないし、使いたくても使い方もわからないでは、図書館はあってもなくてもいいものになってしまふ。生涯学習時代といわれたり、情報化社会といわれたりしても、資料や情報を使いこなして、ものを考える人間を育てていなくては、国民の財産として蓄積されていくことはないような気がする。こんな点から考えるとアメリカやイギリスの方が、はるかに優れ

た教育をしているのではないだろうか。

図書館づくりを進める

図書館が図書館であるために、本当に図書館を必要としている人に使ってもらうためには、図書館員だけが本の使い方や、図書館のことをわかっけていてもダメなのである。

昨年までいた日本図書館協会では、図書館の本当のあるべき姿を理解してほしいと、いろいろな機会を使って多くの人に訴えてきた。映画を作り、ビデオにして図書館の姿を見てもらったり、機会あることに「図書館とは」という原稿を多くの新聞、雑誌に書かせてもらった。

図書館のことがわかっけていない人たちに、図書館のことをわかっけてもらうためには、実物を見てもらうのが一番確かである。市川市から誘われたとき、先のことも、通勤時間の長くなることも気にせず二つ返事で応じたのは、理想の図書館をつくらせてもらえる、それを多くの人に見てもらえる、ということがすべてであった。

いま市川市では、平成六年の開館に向けて図書館づくりが進んでいる。この図書館では市民が必要とする資料や情報は、いつでも提供できるようになっていること、

だれもが使いやすいようにできていること、本などを借りだけの施設ではなく、市民の書斎、市民の学問の府としての機能が果たせること、を目指している。

最近、図書館はだんだん大きなものが造られるようになって、蔵書の収容能力も市川市が予定している百万冊では、目をむかれることも少なくなってきた。CDやビデオなどどこの図書館でも持つようになってきているし、障害者へのサービスもこと新しいものではない。資料面からでは、複製絵画の貸出しを本格的にしてみたいと考えていることと、雑誌を千タイトルにしたいと予定していること、できれば外部のデータベースの導入を図りたいと考えていることぐらいである。

その他では、学校など図書館以外の機関とオンライン等での情報提供、資料提供を予定しているが、これはこの秋から二つの学校と結んでの実験を始める。

でも本当に見てもらいたいと考えているのは、書架の周囲に配置された閲覧席や、ソファで読書したり、調べものをしている市民の姿であって欲しいのである。間違っても学生の勉強席だけにはしたくない。今からそのことだけを願っている。

ABAブックフェア見聞記

筑摩書房 菊池明郎

「新文化」記者の村上さんに、ABA（全米書籍商協会）大会に行かないかというお誘いを受けたのは、確か昨年（昭和）の正月明けのことだった。昨年（昭和）の開催地はラスベガスであり、ギャンプルが弱く誘惑にも弱い私は、危険を察知してお断りした。その時、翌年の開催地をうかがうと、ニューヨークとのことだった。どうせ行くのならニューヨークの方がいいなとつぶやいたのを、村上さんはしっかりと覚えていて、今年改めて勧誘されてしまった。六月には春闘も終わっているし、その頃までには筑摩書房も更生会社を脱却するはずだ。何とかなるだろう

との読みもあって行くことにした。アメリカが初めての私にしてみれば、ラスベガスよりもニューヨークに魅力を感じてもいた。このようなわけで、一〇日間のABAツアーに参加することになったのだが、めったに行く機会のない参加者達のために、団長格の村上氏はワシントンやロスアンゼルス、サンフランシスコを旅程に組み込んで下さった。

ちょうどタイミンがいいというのか、本の再販制が外されるかもしれないという話題が、わが業界を震撼させており、非再販で長年にわたって本を売ってきたアメ

リカのシステムを、A B Aブックフェアを見学しながら見てこれたらという思いもあった。百聞は一見にしかずというけれども、今回のツアーに参加して改めてその通りだという実感を深めた。

五月三一日成田発のニューヨーク直行便は、湾岸戦争が終わったこともあって、ビジネスマンや観光客で満席だった。去年は往復とも飛行機はがらがらだったと聞いていたので、がっかりしてしまっただが、悪い時には悪いことが重なるもので、ニューヨークが激しい雷雨に見舞われたため、三時間遅れの一五時間もの長旅となってしまった。

翌朝は旅の疲れを癒すつもりもあって、ニューヨークの中心にあるホテルからジョギングでセントラルパークを目指した。あらかじめ地図を見て街に出たのだが、セントラルパークとは正反対の方向にある国連本部ビルにきてしまった。テレビで見て記憶していたのと、旗をたてるポールが林立しているので、ああこれが国連本部かと気がついた。あわてて来た道を引き返しセントラルパークに辿り着いた。緑深い公園の空気を吸って目を寛ました後、ホテルのすぐそばで朝食を食べにでかける同

行者三人に会った。ところが、彼等と別れたとたん、ホテルの所在地が思い出せなくなってしまった。A B Aフェア会場に行く前から迷子になったのかと情けなくなってしまった。おろおろしているばかりではどうしようもないので、下手な英語で恐る恐る通りにたむろしているタクシートの運転手達にホテルの名前を告げると、思いのほか親切に教えてくれた。ニューヨークもそんなに怖くはなさそうだとほっとした。

A B Aフェアが開催される会場は、ジャビッツ・コンベンションセンターという全米屈指の広さを誇るところなのだが、一番治安の良くないとところだからくれぐれも気をつけるようにと旅行社の人にも念を押されていた。間違っても歩いて会場の往復などしないように。万一そうせざるをえない場合、四〜五人のグループでまっすぐ前だけを見てウエストサイドを突っ切ってくるように。こういう注意を受けていたわりには、シャトルバスの窓越しに見える街の光景はおだやかだった。日曜日の午前八時台だからなのかもしれないが、ホームレスの黒人男性を一人路上に認めたくらいだった。

さて期待して入場した第一印象は、予備知識があった

せいかもしれないが、まあこんなものかという程度だった。しかし次の瞬間ウーンとうめき声を発することになった。五〇%OFFの文字が目飛び込んできたからだ。話には聞いていたが軒並どのブースにも、その位の数字が書かれているではないか。ふだんは八〇%でしか御さないという大学の出版部でも、五〇%OFFと表示してある。ブースを数えてみると、日本よりもはるかに多くの大学出版部があるようだ。

大手出版社はこの秋から冬にかけての近刊のパンフレットや見本をならべ、中小出版社は、さらに既刊本も展示している。いずれも、会場で契約すると五〇%位のマージンを得られるのが書店主にとっては、大きな魅力なのだろう。会場内に設けられた喫茶コーナーでは、真剣な表情で商談をしている人達が目立った。わが国と比べて取次が発達していないお国柄のせいか、アメリカの書店人にとっては、A B A フェアでの仕入れは重要なことなのだ。新刊が委託でどんどん送られてくるわけではないので、仕入能力の有無が書店経営にストリートに結びついてしまうと思われた。A B A フェア後ニューヨークをはじめ各都市で、できるだけ書店を訪問してみたの

だけど、新刊でも一〇%とか二〇%という割引ができてるのは、これだけのマージンがあるからなのだと思う。ただし、原則的には買切りという厳しい世界でもある(一部、ある範囲での返品は認めている出版社も結構あるようだ)。一方、出版社側にとっては事前に予約注文をどれだけ集められるかということが、営業活動の重要な部分を占めていて、A B A フェア会場は大事な受注の場でもある。そのため各ブースは様々な工夫がなされていて、とても楽しかった。一般読者の入場はほとんどゼロという商談が主体の会場なのに、童話の主人公達の大きな人形が何十ブース分かを使得ぐるぐる回っているなど、いかにもアメリカ的な豪快な展示だった。各ブース毎に用意されているサービスマンも工夫されていたり豪華だったり、中でもタイムライフ社の赤い布地の手提げ袋は、お店で買えば七〜八ドル以上はすると思われるいいもので、大変人気があった。こういう袋を最初にもらって会場をまわると、パンフレットやサービスマンをどんどん入れられるので重宝した。キャンペーンやクッキーのサービスをしているブースもあって嬉しかったが、極めつけはドイツの出版社のワインサービスマン

た。

今回のABAフェアのブース数は二、五〇〇弱ということ、規模の大きさを想像できると思うが、一ブースは約一・五坪の広さで使用料が一、二〇〇〜一、五〇〇ドルということだから、まあまあ料金か。しかし、大手出版社は飾りつけも含めて一ブースに一万ドル以上もかけるそうなので、ABAフェアにかける出版社の気込みの凄さが伺い知れよう。参加者は約三六、〇〇〇人だったそうだが、これは延人数ではなく登録者数なので、会場での印象は大盛況というのに近かった。私達はビジター券を買って入場したのだけれども、一日二〇ドル(約二、八〇〇円)もするので、はっきりした目的がなければフェア会場に足を運ぶことはできないはずだ。一般読者を対象とし、しかも入場無料の東京ブックフェアとは全く性格の異なるブックフェアであることが、このことからもお分かり頂けるであろう。

出展者のターゲットは書店以外には、海外の出版社で、翻訳権と共同出版を目的にしている、私達一行の中では社会思想社の編集担当役員の方がこの目的でいくつかの出版社と交渉されていた。

その他面白いと思ったのは、小出版社のブースが約一〇〇ブースほど三階のフロアに並んでいて、こんなんで商売になるのかいなと思われるようなブースもあったけれども、本が好きでしょうがないといった感じの人達が全米から集まってきて、一生懸命自分達の作品をアピールしているようで好感をもてた。

日本からは講談社インターナショナル、小学館、福音館等がブースを出されていたが、日販は六ブースも出展し、社長や専務を始めとする首脳陣も出張してきており、ABAフェアに対して並々ならぬ意気込みで臨んでいるのが印象的だった。担当者の方にお聞きしたところ、ビジネスとしてもかなりいい線が出ているという話だった。

私達のグループは、書店、取次、出版社、業界紙記者と色々な立場の人達で構成されていたのだが、共通していたのはアメリカの出版界をできるだけ見て帰りたいということだった。ABAフェア見学が終わると、取次・書店見学、議会図書館見学をし、さらに日本人のオーナーが経営するサンフランシスコの小出版社と話し合いをするというハードスケジュールを、一人の病人も脱落

者も出ずことなしにこなしてしまった。空き時間には、美術館に行ったり、ミュージカルを見物したり、大リーグの野球を見物したり、ショッピングを楽しんだり、疲れを知らぬ中年オジサンパワーだった。以下かいつまんで印象に残った点を報告したい。

村上氏が東京で予約をしておいて下さったため、アメリカ第二の取次会社であるベーカー&テラー社のニュージャーシーの物流倉庫の見学をすることができた。その際通訳をして下さったのが、「人文会 ニュース」に三回にわたってアメリカの出版事情をレポートされた豊田恭子さんだった。彼女のおかげで見学は充実したものになったが、彼女は私達のために勤務先を半日休んで尽力して下さったということで、改めて紙上で感謝申し上げたい。B & T社は図書館のシェアが六〇〜六五％（取引図書館が約八、〇〇〇）、残りの三五〜四〇％が書店（約六、〇〇〇）で、上記の他にジョージア、ネバダ、イリノイに物流倉庫があり、最近カリフォルニアにAVソフトの物流倉庫を作ったそうだ。ニュージャーシー本社のデータベースには、一四〇万点の書籍が入力されているということで、アイテム数の多さにびっくりした。

我々が見学したニュージャーシーの倉庫は倉庫部分だけで約六、〇〇〇坪あり、物流現場に約四〇〇名が配置されている。注文は、電話、郵便、コンピュータのオンラインで受けている。約一二万点、二四〇万冊の在庫があって、書店からの注文に対しては、在庫がある場合翌日出庫するそうだ。出庫の最低単位は五〜一〇冊で、一冊の場合郵送には応じるけれども、送料は書店負担となるらしい。図書館の注文は装備をからの出庫となるので、その分時間がかかることになる。装備の様子は注文主の要求に沿って行うということだった。現場のライオンはコンベアが上下二段になっており、上が急行で書店用、下が普通で図書館用となっているだけで、わりと単純な仕組だった。ただし、本が入荷すると、バーコードをスキャンし、あいている棚へ入れ、その際三通りの数字の組み合わせだけで、たとえ英語が読めなくても本の所在が突き止められる、という合理的なやり方だった。高いお金をかけなくても、それなりの合理的なシステムが作れることが分かった。ただし、その前提条件として本にバーコードをつけなければならないのだが。

ニューヨークを振り出しに、ワシントン、ロスアン

ジュルス、サンフランシスコ各都市で書店をまわってみた。どの書店でもなんらかの割引販売を行っているのには、驚かされた。新刊でも一〇〜二〇%はあたりまえ。バーゲンを主体にしているある書店ではシドニー・シェルドンの本がカバープライスの一八%とか二六%の値付けがされていて、これには少なからずカルチャー・ショックめいたものを感じた。当店の会員にはすべて一〇%引きというのもあったし、赤いシールを貼ってある本を一冊買うと、もう一冊はただというやり方もあった。非再販は読者にとっても、業者にとっても大変なことなのだと思った。

書店の規模や商品構成の豊富さでは、日本の超大型店の方が数段レベルが上と感じた。人文書の棚も一般的に日本の書店より少なく、分類も哲学、心理、宗教といった程度のラフな分類だった。しかし、文学や児童書の棚はわが国の書店よりも多く、分類もきめ細かくなされていた。二〜三の書店では、料理の本にびっくりする程のスペースをさいているのが印象的だった。

最後に、ヘイアン・インターナショナルというサンフランシスコにある出版社の方々とのお話しを紹介した

い。この出版社は平均五五%で書店に本を卸すため、本の原価率を二〇%以下におさえないと、やっていけないそうだ。そのためにシンガポール、マレーシア、香港などで印刷、製本をしているそうで、印税も平均すると五〜六%程度しか出せないらしい。ペーパーバックの初刷が三、〇〇〇〜五、〇〇〇、絵本で一〇、〇〇〇というと私達の世界に近い。セールスマン(契約しているのが二五人位)にはくれぐれも書店にオーバースールしないように注意を与えているそうだ。その結果返品率は三位だそうで、この程度の数字じゃなければやっていけないというから厳しい。それでも社員は年収三万ドル程度しかもらえず、志がなければとても出版なんかやっていけないと、ヘイアンの湯川社長が発言されたとき、出版社のメンバーは「やっぱりアメリカも同じか」と相槌を打ったのだった。

公共図書館や大学図書館を見学し懇談もしたかったし、もう少し多くの出版社との話し合いもしたかったが、時間切れとなり帰途についた。もしかた機会ができれば、今回やり残してきたこれらの課題を解決したいと思っている。

弘報委員会より

○十月一日から四日まで第二十二回人文会研修旅行を実施いたします。今回の訪問地区は名古屋です。中部地区の中心都市名古屋を訪問するということで、一同ハッキリしております。

○新しい試みをいろいろ行ないました。その成果はいかに。次号では、「研修旅行報告記」を掲載いたしますので、ご期待下さい。

○今号の内容はいかがでしたでしょうか。具体的にそして楽しくご執筆いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

○毎号「人文会ニュース」の構成について、弘報委員会では侃々諤々（かんかんがくがく）の議論を行なっています。

「こんなテーマを取り上げては」というご要望がございましたら、ぜひお知らせ下さい。お待ちいたしております。

（九月十五日記）

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1991. 10. 現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
	青木書店	古川 清	162	新宿区早稲田鶴巻町 538	3202-3999	3204-1187
	大月書店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
幹事	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁草書房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	3813-8105	3813-9061
	春秋社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
幹事	晶文社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
幹事	誠信書房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
幹事	創元社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	3269-1051	3269-1092
代表幹事	筑摩書房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	3811-8814	3812-6958
	日本評論社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	3987-8621	3987-8590
幹事	福村出版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	3813-3981	3818-2786
幹事	平凡社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 Kビル	3265-0455	3263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	3237-1731	3237-8899
会長	みすず書房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	〃	持谷 寿夫		〃	3814-0131	3818-6435
	未來社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
	雄山閣出版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有斐閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
	吉川弘文館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会 ◎重光 ○竹内 古川 氏家 武 阿部
 弘報委員会 ◎土屋 ○原田 佐久間 西谷 辻村
 調査・研修委員会 ◎濱地 ○澤畑 渡辺 菅田
 図書館委員会 ◎萬洲 ○持谷 市川

画家ダヴィッド

革命の表現者から皇帝の首席画家へ
鈴木杜幾子 ふたつの苛烈な時代を生
き抜いたフランス新古典主義の代表的
画家。その生涯と仕事を通じて、忘れ
られた西洋近代絵画の正統を掘り起こ
した気鋭の力作。 4200円

公共性の喪失

リチャード・セネット 北山・高階訳
19世紀の市民社会の成立時から、私的
生活の肥大と公的生活の衰退を歴史的
に検証し、「公」と「私」のバランスを
欠いた現代社会のメカニズムを鋭くえ
ぐる野心的研究。 5800円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話(3255)4501

老いとの対話 死との対話

猪俣満子著 選択の余地のない道を生きた普通
の主婦が、三人の肉親を看取り、そして自らの
「老後」は海外移住へ。その力強さ、明るさが胸
をうつ感動のエッセイ集。 四六・一八〇〇円

●主婦翻訳家留学始末記

予価一七〇〇円

マダム・ジャポンは
袋だたき

福本秀子著

社会思想社

東京都文京区本郷3・Tel 03-3813-8101

影響力 なぜ、人は動かされるのか の武器

ロバート・B・チャルデーニ―著
社会行動研究会―訳

定価 3400円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03-3946-5666

シモーヌ・ヴェーユ

その劇的生涯

■C. ダルヴィ他／稲葉延子〈編訳〉
稀有な女性思想家の生き方に迫る話題
の戯曲と兄アンドレ、吉本隆明らの発
言を付す、最良のヴェーユ入門。1900円

〈第II期〉

G.K. チェスタトン著作集

〈評伝篇〉全5巻

◆P. ミルワード〈編集・解題〉

③ブレイク／ブラウニング

■中野記偉訳 詩人、画家ブレイクの
神秘に迫る刺激的論考と、漱石も絶讃
の出世大作『ブラウニング』。 2900円
既刊④バーナード・ショー 安西徹雄訳 2500円

▶定価は消費税込み

東京都千代田区
外神田2-18-6

春秋社

☎(03)3255-9611
振替東京8-24861

「知の再発見」双書

フランス・ガリマール社と提携
世界14カ国で出版

ゴヤ

スペインの
栄光と悲劇

堀田善衛監修 動乱の18世紀に活躍し、ヨーロッパ絵画史上においてもひとときを輝く巨人ゴヤの足跡を豊富な図版でたどる。1300円(税込)

モーツァルト

海老沢敏監修 17歳まで旅に生き、ヨーロッパ文化を吸収し、その粋を音楽に表現した神童の足跡を興味深い図版で描く。1300円(税込)

創元社

大阪北区西天満1-4-2
東京都新宿区山吹町334-11

現代進化化学を一望する

講座 進化

全7巻

柴谷篤弘・長野敬・養老孟司 編

●A5判上製カバー装／平均240ページ ●各2472円

①進化論とは／②進化思想と社会(9月刊)

東京大学出版会

シルバー世代の 最新 ホーム・ガイド

全国有料老人ホームの選び方

国民生活センター／編 2600円

全国147ホームの実態を公的機関が調査。最も信頼できるガイドブック

不登校児の 新しい生活空間

河合 洋／編 1600円

学校以外のユニークな教育現場が注目されている。その共同生活を紹介

日本評論社

豊島区南大塚3-10 ☎3987-8621

J・ブルクハルト 新井靖一 訳

ギリシア文化史

全5巻

文化史の巨匠の名著、待望の本邦初全訳。ギリシア人の文化、すなわち彼らの全生活における「考え方と物の見方」の変遷を、膨大な文物によって跡づけた古典的名著。A5判。

●第1回好評発売中 第1巻 6900円

筑摩書房

〒111 台東区蔵前2-6-4
☎03(5687)2680 (定価は税込)

法政大学出版局

クリストファー・ヒル

十七世紀イギリスの宗教と政治

宗教論の関心から、その苦悶の歴史を、特異な背景の中で、革命時代のイギリスの深淵を、ピューリタン闘争の連綿たる証・分析する。

高橋安光

旅・戦争・サロン

旅に出ると、サロンの世界が広がる。フランス、ドイツ、イタリア、ロシアの歴史を、戦時下のヨーロッパから、18世紀のフランス、ドイツ、イタリア、ロシアの歴史を、戦時下のヨーロッパから読み直す。

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1
☎03-3237-1731 振替・東京6-95814

〈最新刊〉

間々田孝夫著 行動理論の再構成

定価三〇〇円

心理主義と客観主義を超えて、人間行動の説明要因を総合的に整理し、論述する意欲作。

木下富雄・棚瀬孝雄編 法の行動科学

定価四〇〇円

応用心理学講座⑤
法に固定したものという常識を覆す多彩な研究を集大成。

東京・文京 福村出版 電話 (03) 3813-3981
小石川1-3 *定価は税込*

宇宙物理学の最前線

ホイル/ナリカー 自然界の四つの力を軸に天文現象を解説。宇宙創成の謎に鋭くせまる。桜井・深田・星野訳 八五五円

ハイデッガー ツォリコン・ゼミナール

ボス編 存在と時間、心身問題と科学論……。二〇世紀最大の哲学者の思索と根源への問い。木村敏・村本昭司訳 五五五円

劉賓雁自伝

中国入ジャーナリストの軌跡 亡命の反体制作家・ジャーナリストが、毛沢東の中国の真実を語る。過酷な時代を背景に描く自画像。鈴木博訳 五五五円

母権論

1 古代世界の女性支配に関する研究 バッハオーフェン 父権制以前に母権制を発見し、ユングらに大きな影響を与えた神話・法研究。岡・河上監訳 六六六円

東京文京本郷 3丁目17-15

みすず書房

サル学 現在 立花隆

サルを知らずして、ヒトは語れない



世界の最高水準とされる日本の霊長類学はどこまで発展し、何を明らかにしたのか。日本の代表的霊長類学者21人と語りあう中でサルたちの生態・行動から人類の進化までを知る。 ●定価3,200円(税込)

平凡社 〒102 東京都千代田区三番町5 振替・東京6-29639 ☎03-3265-0455

吉田常吉著
井伊大老によって断行され、連坐者百余名を出した大弾
圧、安政の大獄。その真相を派閥の観点から明らかにする。

安政の大獄

(日本歴史叢書)

四六判/定価三〇〇〇円

水藤 真著 (中世史研究叢書) 四六判/定価二六〇〇円
公家・武家・庶民、男と女の場合など中世の葬送・墓制の事
例を紹介し、その実態を解明。葬送儀礼の淵源を探る。

中世の葬送・墓制

吉川弘文館

東京文京区本郷7-2・電03-3813-9151

ヘーゲル用語事典

岩佐茂・島崎隆・高田純=編
定価2884円

ヘーゲル哲学の主要用語94項目を
選び、現代ヘーゲル研究の成果を
生かしながら平明な解説を加える。
付=地図・年譜・文献解説・独和索引

社会的理想としての共同体

E.カマンカ編 土生長穂・文京洵訳
定価2575円

ダッハウ収容所のゲーテ

ニコ・ロスト著 林功三訳
定価3605円

(表示価格は税込。送料一律310円)
東京・文京 小石川3-7 未来社 電話(03) 3814-5521

AMERICAN JOURNAL

ビートハミル

アメリカン・ジャーナル

高見 浩◎訳 ¥1400

病める国アメリカへ、ジャーナリスト
ビート・ハミルが送る熱いメッセージ!
いま、アメリカが抱える重く厳しい現実
に真正面から挑んだ本格的コラム15編。

社会主義と現代世界

平子友長◎著 ¥3500

東欧やソ連の経済はなぜ破綻したか、社
会主義再生の条件はなにか? 唯物史観の
公式、ベルンシュタイン理論等を再検討。

青木書店

東京新宿鶴巻538 ☎03-3202-3999 [価格税別]

非
売
品

母性を解読する

つくられ
た神話を
超えて

グループ「母性」解説講座編
「母性」は女性の本能だといわれる。本当にそうた
ろうか。社会学・心理学・歴史学・女性学・医学の側面から徹底的に考える。
(有斐閣選書) 定価一七〇〇円

森林の明日を考える

自然享有権の確立をめざして
日本弁護士連合会公害対策・環境保全委員会編 森林危機の実態
と現行法制の問題点を分かりやすく整理するとともに、「国民の財
産としての森林」という視点から(自然享有権)を提唱する。
(有斐閣選書) 定価一七五〇円

有斐閣 101 東京都千代田区
神田神保町2丁目17 電話:03-3265-6811
(定価は税込です)

1991年10月10日発行 年4回発行 第62号

発行所 人文会 筑摩書房内
〒111 東京都台東区蔵前2-6-4

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印